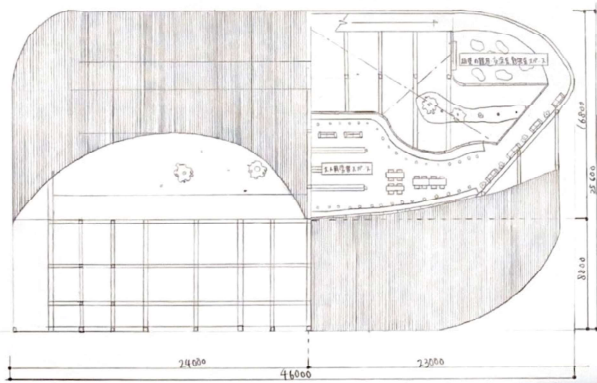


S=1:200 平面図



S=1:200 立面図



子供のゼロからの成長を促す ゼロ地点になる空間を

模型

吉川市 美南地区	私の住む埼玉県吉川市美南地区は、過去15年で駅、小学校、中学校、合計1000戸のマンション、ショッピングモールなどが次々と建ち、今もお開発がされている新しい街だ。右の表からわかるようにほかの地区と比べると人口が大きく増加していることがわかる。また0歳から15歳の人口が全体の約30%と、子供が多い地区でもある。	
市の読書環境	そんな美南地区には大きな図書館や本屋がない。美南地区から一番近くの図書館へは車で20分かかり、本屋へは隣の三郷市まで行く必要がある。このことは小中学生のように学校の図書館で頻繁に本に触れることのできない未就学や、頻繁に遠くまで足を運ばないお年寄りにとって特に大きな問題だろう。私はこの問題に目を向け解決すべく、主に未就学児とお年寄り用の図書館の設計を試みた。	
子供と本	子供にとって本とはどのような存在なのか、図書館という場所には何が求められているのか、これを調べるため、私は松岡京子さんの著書『子どもと本』を読んだ。子供の成長には本が身近な存在であること、質の良い読書を保証するために社会が協力して仕組みを作り見守ること、これらが地域住民に求められていることが分かった。GL、つまり美南地区の中心をゼロ地点とし、美南地区で育つ子供のゼロからの成長を皆で見守ることのできる施設を設計することにした。	
敷地	私は敷地を美南中央公園に選んだ。右の写真の赤い点線で囲まれたのが美南地区で、その真ん中には貯水池と公園が存在している。ここには公園で遊ぶ親子からボードウォッシングを楽しむ老人まで、沢山の人が思い思いの時間を過ごしている。この公園の一角に本を媒介とした交流の場を設けることにより、美南地区で新たな楽しみを見出すことができるのではないかと考えた。	
図書館の仕組み	この図書館では市民が貸し出し用の本を寄付することで成り立つ。この地域には小中学生が多く、彼らが幼少期に読んでいたであろう本がゴミ捨て場においてあるのをよく目にしたためシェア型図書館の仕組みを取り入れることにした。貸出希望者は一人一つの本棚を所有し自分の持っている本を図書館に置く。本棚には自分の好きなようにレイアウトすることができ、ポップアップで自分のおすすめの本を紹介したり、感想を書いてもらう用のノートを置いたりすることができる。これにより貸出者と利用者との世代を超えた交流を図ることができる。	
世代間の交流	貸出者と利用者の交流だけでなく、地域のお年寄りとの交流も図ることができる。吉川美南にはジープ会というお年寄りの集まりがあり、小学生の見守りなどの活動を行っている。そこでジープ会と協力をし定期的にボランティアのお年寄りが読み聞かせを行ったり、親の育児相談会を開いたりすることで子育てにやさしい環境づくりを目指す。またお年寄り用にも貸出図書スペースを設けることで老後の新しい趣味の発見や交流、居場所を作ることが期待できる。	

